

書評

哺乳類の生物地理学

増田 隆一 [著] 発行 東京大学出版会 税込 4,104 円

紹介者 柴 正博

生物地理学とは、どこにどんな生物がいて、それがどのようにしてそこに分布するようになったかという疑問に、生物学や古生物学、地質学など学際的な研究によって、その答えを明らかにする学問である。自然科学の黎明期に、どのような生物がどこに分布するかという情報が蓄積して、動物分布の六大生物地理区が提案され、ダーウィンの生物の進化と種の分化の概念を取り入れて、生物分布を研究する歴史的生物地理学が発展し、同時に生態学の重要性も認識された。

しかし、20 世紀後半には、生物地理学の基礎となる形態学的解析を中心とする生物分類学と、その種の系統を明らかにする系統分類学が、古生物学分野も含めて、他の分野の学問に比べて発展しなかった。そのため、生物地理学は分類学の衰退とともに忘れ去られようとしていた。しかし、21 世紀になり、生物の遺伝子情報が明らかになるにつれ、それをういた分子生物学が、生物の種のちがいやその系統を研究する分子系統学を発展させて、今、生物地理学をホットにしている、急速に甦らせている。

本書は、著者が日本に生息するクマやイタチなどのいくつかの哺乳類の分子系統解析から、それらの進化と分布の歴史を研究した分子系統地理学の研究例を示したものである。その中には、北海道のヒグマには3つの異なった系統があり、それらは地域を分けて分布し、歴史的に異なった時代に北海道に渡ってきたことなど、興味深い話題に富んでいる。

また、本書では哺乳類の生態調査に糞の DNA 分析を用いた種や個体識別の研究や、皇居のタヌキを例にした都市動物の生物地理的研究、ハクビシンを例にした外来種の生物地理も紹介されている。



日本列島は、117 種の陸生哺乳類が生息し、その半数は固有種という、大変に固有種の多い地域である。そこに住む私たちは、それらの生物地理の歴史を研究するための研究材料とフィールドがあたえられていて、そのような研究環境は世界でも稀有であると、著者は言う。この恵まれた研究条件を生かして研究することをつづけるためにも、私たちはこの恵まれた自然環境を理解し、残していくことが必要である。

本書は、日本列島の生物地理に関してそれを解明する目的のものでないため、その議論は十分ではないが、著者の分子系統地理学の長年のさまざまな研究を紹介したものであり、とても興味深い。